

## 表2

	従来型内部監査	CSA
長所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・客観性と独立性が高いため、中立な監査意見が期待できる</li> <li>・監査対象部署に大きな負担を強いない</li> <li>・「監査」に対する専門家が従事する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務をよく知る者がリスクを含めた問題点を整理できる</li> <li>・議論の結果としての結論に現場が納得し易い</li> <li>・参加者同士の意見交換による「気づき」が期待できる</li> <li>・決定について、参加者にも自分が決めたこととしての自覚が発生する</li> <li>・ファシリテータを育成すれば対象範囲を拡大できる</li> </ul>
短所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジネス環境の変化が激しいと監査人が監査対象業務を把握しきれない</li> <li>・少ない監査し資源でのカバレッジが心配</li> <li>・非監査対象者のみからの情報に影響され、偏った監査意見を形成する可能性がある</li> <li>・監査計画が順繰り（ローテーション）に陥り易い</li> <li>・一方的な意見として現場から軽視される傾向がある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・客観性と独立性に欠ける</li> <li>・監査対象部署に負担を強いる</li> <li>・ルール遵守方組織では活発な意見交換がなされず、なかなか馴染みにくい</li> <li>・地位や性格の強い者が議論を支配し、意見が偏る可能性がある</li> <li>・匿名性の確保が困難なため、正直な意見が提示されない可能性がある</li> <li>・結果がファシリテータの技量に大きく依存する</li> </ul>